



## コラム15

### 東久留米市の生きもの —武蔵野台地今昔、周辺地域との比較—

東久留米市の植物相を近隣市との間で比較すると、東久留米市(12.9km<sup>2</sup>)では1,273種、隣の清瀬市(10.2km<sup>2</sup>)では1,025種の植物が確認されています。両市で確認された植物の他に、東久留米市でよくみられるナガエミクリのように、清瀬市では確認されなかったものがあります。一方、清瀬市のみで確認された植物には、狭山丘陵を水源とする柳瀬川によって運ばれてきたと考えられる山地性の植物や広い河川敷などに生育する湿地性の植物があります。両市の立地の特色が植物相に現れています。

なお、清瀬市内では、この30年くらいの間に消滅した植物60種が報告されています。主に、在来種といわれる、古くから地域の環境のなかで生態系をつくってきた種類です。東久留米市内でも、以前より生育範囲が狭くなり、個体数が減少してきている在来種があります。例えば、河畔林に見られるハンノキは清瀬市では柳瀬川の崖線の雑木林から湿地にありますが、東久留米市では自生のは見られなくなり、新たに植栽されています。白い花を房状につけるウワミズザクラは清瀬市では崖線に、イヌザクラは雑木林で見られますが、東久留米市ではごくわずかになりました。都心に近い江古田周辺の100年前の記録(武蔵学園)によるとハンノキ、ウワミズザクラ、イヌザクラともに記録されていて、現在より分布が広がったことがわかります。分布域の減少による個体数の減少は、遺伝的多様性の減少につながり、環境の変動に適応しにくくなり、消滅しやすくなると考えられています。

「コラム3 我が町東久留米が大好き」に書かれているように、ムサシトミヨが生息していた1950年頃の落合川には、白い花をつけるバイカモが生育していましたが、汚水が流入するようになって最初に消えていったとのこと(藤田1978)。なお、100年前の江古田周辺の記録には、流れる湧水域の植物、バイカモは記されていません。

さらに、近隣市(清瀬市、東村山市、西東京市、東大和市、武蔵村山市)との比較の結果、黒目川下流部と空堀川上流部の魚類で約5割、落合川下流部と空堀川上流部の植物で約4割の種が共通であることなど、東久留米市内には、近隣市と対応した自然環境と生態系が機能していると推察され、エコロジカル・コリドーとしての役割を果たすことが考えられます。

参考文献：藤田朋子(1978年)「東久留米の野草」東久留米市史料 No.5 東久留米市教育委員会 (p15 4. 流水中と水辺の植物に、バイカモの記述)  
清瀬の植物を守る会(2010年)「清瀬の植物 調査報告」東京都清瀬市発行  
渡邊-東馬加奈・白井亮久・福田泰二(2022年)「大正末期に出版された Flora Musashinoensis (武蔵野植物目録)の再検討」  
武蔵高等学校中学校紀要 第6号 65-114.  
東京都北多摩北部建設事務所(2015年)黒目川整備工事に伴う河川環境調査委託(その7)報告書  
東京都北多摩北部建設事務所(2015年)落合川整備工事に伴う河川環境調査委託(その12)報告書

資料編



ハンノキ



ウワミズザクラ(果実)



イヌザクラ(房状の白花)